ほっといて下さい

～従魔とチートライフ楽しみたい！～

CHARACTERS
登場人物紹介
シルバ
魔獣フェンリル。
ミヅキの従魔で
高度な魔法を自在に操る。
ミヅキ命。
シンク
鳳凰(ほうおう)の雛。
ミヅキに命を救われ、
従魔の契約を結ぶ。
セバス
副ギルドマスター。
美しきナイスミドル。
腹黒で、怒ると
超絶怖い。
アルフノーヴァ
セバスの師匠。
齢三百歳を
超えるエルフ。
ディムロス
ギルドマスター。
強面だが、懐が深く優しい。
ミヅキには「じいちゃん」と
呼ばせている。
ミヅキ
事故で命を落とし、幼女として
転生してしまった。
無自覚チートを発揮しつつ、
異世界ライフを満喫中。
周囲が過保護すぎるのが悩み。
コジロー
短剣使いの忍者。
ギルドでは、ミヅキの
講師を務める。
無口だが愛情深い。
ベイカー
誠実で頼りがいのある
A級冒険者。
ミヅキの保護者で、
彼女には常にデレている。

プロローグ

「うーん」

ズキズキする頭の痛みで目が覚めた。

昨日は勤めている会社の歓迎会だった。

本当はまっすぐ家に帰って、ペットの犬の銀と戯れたかったが、会社の上司に無理やり参加させられて、苛立ち、ヤケクソで酒をたらふく飲んでしまった。

クッソー、調子に乗って飲み過ぎた……うぅぅぅ……どうやって帰って来たのか全然覚えてない。

「じん、じん？」

いつものように愛犬の銀を呼ぶが、思うように言葉が出ない。伸ばした手に触れる感触もいつもの布団の上ではないようだった。

うん？　なんか変だな、床で寝ちゃったのかな？　地面がなんかいつもと違う。

頭を押さえていた手をゆっくり退けて、目をそぉっと開くと……

「は？」

――目の前に広がるのは綺麗な青い空。周りをぐるっと確認すると、木がうっそうと茂っている。

私はいつの間にか森の中にいた。
「は？」
もう一度声を出してみたがやっぱり森だ。
あれ？　ここどこだ？　なんで森なんかで寝てるんだ？　ちょっと落ち着こう！　昨日のことを思いだそう！
土の上で正座し、目を瞑り考え込む。
確か、もう歩くのもだるかったのでタクシーに乗って、自宅近くのコンビニまでと頼んだはず。そこでいつもの銀のおやつを買って……
「うっ！」
ズキッと頭が痛み出し、頭を抱える。
そうだ……。外に出て、家に向かおうと角を曲がったら……車のライトが眩しくて目を閉じたなぁ。
私は痛む頭のことはすっかり忘れ、やってしまった……と天を仰いだ。
あー私……死んだのか。なんかあんまり実感わかないなぁ～。
キョロキョロともう一度周りを見てみるが、普通の森に見える。
「ここ、てんごく？」
本当の天国など知らないが、もう少しいい場所なんじゃないかと夢を見ていた。雲の上にあったりしてふわふわキラキラの世界なのかなぁ……なんて思ってたのに……

もう少し周りを見てみるかと立ち上がろうとして、
「きゃ」
バランスを崩し、おしりからコケてしまう。
あれ？　上手く立てない。
少し格好悪いが前に体重をかけてゆっくり立ち上がる。……なんか景色が低い？
地面を見ると小さい足が見える。
「ありぇ」
なぜか幼児語が口から出てしまい、パッと口を押さえた。
……えっ、えっ？
軽くパニックになりながら自分の手を広げて見つめる。
「ちいさい……」
これは転生ってやつかなぁ……と、軽く現実逃避しながら他人事のように思ってしまった。
まぁ憧れてたけど、実際なると困ったもんだなぁ。
「しゃて、どうするか……」
可愛い幼児の声がぽつんと森に響いた。

一　従魔

銀はどうしてるだろう……
自分の今の状況も不安だが、それよりも愛犬の銀のことが気になる。
私が帰ってこなくて心配してないかなぁ。早く誰かに見つけてもらって、保護されているといいんだけど……
銀の心配をしながらとりあえず休めそうなところを探し、前に進む。しかし、いくら進んでも景色は一向に変わらない。
どうしよう、どっちに向かえばいいのか全然分からない。ちょっと泣きたくなってきた。
幼児の体に反応してか、鼻の頭がツーンとして涙が出そうになる。
ダメだ。泣いたって誰も助けてくれない！　現実は甘くない、女の涙は全然最強ではないんだ。
私は小さい足を踏ん張って前に歩き出した。

どれくらい歩いただろう。ふとなにかの気配がしてそちらのほうを見てみるが、特になにもなかった。でも、なにか、誰かが呼んでいる気がする。
私は呼ばれている気がする方向に、フラフラと導かれるように歩いて行った。

しばらく進んだけれど、疲れて「もう、限界！」と膝をつきそうになる。顔を上げると、少し先の木々の合間に、光が差し込む場所が見えた。
あっ、少し開けた場所がある！
私は力を振り絞って前に進んだ。
「わぁ～きれい！」
うっそうと茂る木々の下を抜けると、そこには小さな湖があり、湖畔には色鮮やかな花が咲き誇っていた。最初目覚めた時、ここに寝ていたら天国だと思っただろう。
私はとりあえず湖に近づき、水をすくい上げてパシャッと顔を洗った。
綺麗な水。だけど飲んだらまずいかなぁ。でも、喉はカラカラで唾も出ないし……
覚悟を決めて少しだけ口に含むと、冷たい水の甘みが広がった。我慢できずに少し飲み込んでしまう。
「おいちぃ～！」
ぱぁーと笑顔になるほど水は美味しかった！
すっごい飲みやすい水！　水道水より全然美味しいわ！
小さい手に水をすくって更にゴクゴクと飲んでいく。喉が潤ってほっとすると、今度はぐぅーっとお腹が鳴った。
「うぅぅ、おなかすいたぁ～」
水に足をつけ、なにか食べられそうなものはないかと周りをキョロキョロと見回すと、草木で陰

になっているところに、なにやら黒っぽい塊があるのに気が付いた。
なんだろ……。なぜか妙に気になり怖々と近づいてみる。
「っ！」
私は声が出るのを両手で必死に抑えた。そこには真っ黒な毛並みの、大きな獣が横たわっていたのだ。
犬？　いや、狼？　にしてはデカい。あんな大きな動物見たことない。
私は獣に気付かれないようにそぉっと後ずさりする。しかしまだ小さい体に慣れていないため、トンッと尻もちをついてしまった。
ヤバい！　気付かれる！
私は思わずギュッと目を閉じた……が、なにも起こらない。
恐る恐る目を開けると、黒い獣はその場から動いた気配がなかった。
よかった～、気が付かなかったみたい。
私はほっとして、音を立てないようにハイハイをしながら木の陰に隠れた。そして獣がいなくなるのを待つことにした。
……全然動かない。
しばらく待ってみたが獣は微動だにせず、目を閉じて蹲ったままだ。
もしかしてもう死んでるのかな？
死体ならちょっと場所を変えてあげようかと思い、そっと近づく。触れるほど近くに来たが、獣

はやはり動く気配がなかった。
やっぱり死んじゃってるのかな……。可哀想になりその毛並みを優しく撫でると、微かに手のひらに温もりを感じた。
――まだ死んでない！
私は急いで周りに落ちている木の葉などを集めて、獣の体を温めた。小さい体を獣にくっつけて、毛をさする。
頑張って！　頑張って！　死んじゃダメだよ、と心の中で必死に祈りながら獣を温める。真っ黒い毛並みが愛犬の銀と重なり、泣きそうになるのを必死に堪えて、私は「頑張れ！　頑張れ！」と声をかけ続けた。
ペロペロとなにかが顔を舐める感覚で目を覚ました。
いつの間にか眠っていたらしい。私の顔を舐めているのはおそらく銀だろう。いつも朝はこうして起こしてくれるのだ。
「じん、やめてぇ～。くしゅぐったいよ～」
クスクス笑い、銀を撫でながら目を開ける。しかし、目に飛び込んできたのは見慣れた銀ではなく、大きな獣だった。その黒毛は、月の光を浴びてうっすらと銀色に耀いている。
「！」
驚きのあまりビクッと体を硬直させ、瞬時に昨日のことを思い出す。どうやら獣を撫でながら寝

てしまったようだ。
このまま食べられちゃうのかな……
ドキドキしながらじっとしていると、獣は尻尾をパタパタと振り、相変わらず丹念に顔を舐めてくる。その姿に愛犬の銀が被った。
そぉっと頭を撫でてみるが、嫌がった様子も見せず、むしろ喜んでいるようだ。
「かわいいね」
ニコニコしながら撫でてやる。獣は嬉しげに目を細め、私を大事そうに自分の毛並みの中に引き寄せた。
「ふふふ、くしゅぐったい」
毛がふわふわで顔や体に当たり心地よい。ギュッと抱きつくと、胸の奥でカチッとなにかが引っかかる感じがした。
あれ？　と思い胸をさすっていた、その時――
【待っていた……】
突然、低い声が頭の中に響いた。
ハッと顔を上げると、獣が優しい金の瞳でこちらをじっと見つめていた。
「いま、あなたがしゃべったの？」
獣は私の言葉を肯定するように尻尾を振り、優しい眼差しを注ぐ。
【お互いに惹かれ合い、俺が認めて従魔の契約をした。だからこうして話すことができるのだ】

わけが分からずポカーンとしていると、【嫌だったか……】と耳を垂らし悲しそうな顔をするので、慌てて否定する。
「ちがう、ちがう、いやじゃないよ。びっくりしちゃったの」
そう言ってにっこりと笑いかける。すると、獣は嬉しげに尻尾をパタパタと振った。
なんか尻尾を振るだけで、結構な風圧が出てる気が……尻尾の周り、葉っぱがなくなってるし。
「ううんと、えっと、じゅうまのけいやくって……」
うーん、喋りづらいなぁ。そう思っていると、頭の中で声が響いた。
【喋りづらかったら、頭の中で話してごらん】
にっこりと笑って獣がこちらを見つめる。
「あたまのなかでしゃべれるの？」
びっくりしたが落ち着いて息を吐き、さっそく試してみる。
【こんにちは～】
【……なんで挨拶をする？】
獣が首を傾げる。
【なんとなく？】
年甲斐もなく、小さく舌を出しておどけてみせると、獣はピシリと硬直してしまった。それほど酷い顔だったのかと思いズーンと沈むが、気を取り直して尋ねた。
【えっと、まず名前を聞いてもいいかな？　お話しするのに不便だし……私の名前は美月って言う

んだけど】
【俺はフェンリル。だがそれは種族の名だ。名前はミヅキがつけて欲しい】
獣は、ハッとしてそう言い、凛(りん)とした姿勢でおすわりをする。その姿まで銀にそっくりだ。
ふいに愛犬の銀を思い出し、目に涙が浮かぶ。すると、フェンリルは慌てて【嫌なら無理にとは……】と、シュンと耳を垂らした。
落ち込んだ様子が可愛らしく、ふふっと笑って頭を撫(な)でてやる。
【ごめんね。嫌なわけじゃないんだよ。前に一緒にいた子を思い出してしまって……あなたがその子にあまりにも似てたから、嬉しいような、悲しいような気持ちになってしまったの】
私の言葉に、フェンリルはほっとして表情を和(やわ)らげた。
【俺に似ているとはどんな奴だったんだ？】
【うーん。一言では言えない大事な家族だった。私がいなくなっても、幸せでいて欲しいんだけど……】
ちょっとだけ笑ってフェンリルを見ると、彼は少しだけ悲しげな笑みを浮かべた。
優しい子だな。本当に銀にそっくり。
私は銀を思い浮かべながら、目の前のフェンリルの名前を考える。
【じゃあ、あなたの名前は……シルバ。私の大事な子と同じ色の名前。あなたのその美しい黒い毛並み、月の光を浴びるとキラキラ銀色に耀(かがや)くから、シルバってどうかな？】
にっこり笑って聞いてみると、フェンリルの体が淡く光ったように見えた。

【俺の名は〝シルバ〟。いい名をありがとう……ミヅキ】
シルバは嬉しそうに頬を擦(す)り寄せた。

◆

なんでこんなことになったんだ……
体が思うように動かせない。
とりあえず安全な場所で体を休めようと、周りの気配を探るが思うようにいかない。フラフラになりながらどうにか進むと、少し開けた場所に水場が見えた。
もう横になりたかったので、俺は草木の陰に体を横たえた。
クソ……なんかモヤモヤする……なにかが足りない！　が、なにが足りないのか分からない。
無性にむしゃくしゃして、気持ちを発散しようと所構わず暴れていたら思わぬ罰を天から与えられ、俺は深い傷を負った。
しかしそんなことはどうでもよかった。もう疲れてしまった。
この満たされぬ思いを抱えたまま生きるのは辛すぎる。このままここで終わろうかと目を閉じていると、不意にフワッといい香りが俺を包んだ。次いで、温かく気持ちいいものが体に触れる。
少しずつ傷ついた体の痛みが引いていく……うっすら目を開けると、目の前で幼子(おさなご)が体に張りつき一生懸命俺をさすってくれていた。

この人を俺は知っている……

なぜか懐かしい気持ちがするが、この幼子に会ったことはないはずだ。しかし、この幼子が触れるたび、ポッカリ空いていた心の隙間が埋まるような感覚がする。

こちらが見ていることにも気付かず、幼子は瞳に涙を溜めて「頑張れ！　頑張れ！」と声をかけ優しく体をさすってくれる。

俺はこの人をずっと待っていたのか。あぁ、この人を守らねば……

なぜかそんな考えが頭を過る。

目を再び閉じると心のモヤモヤは消えて、不思議と幸せな気持ちで満たされていた。

しばらくして、ずっと励ましながら、俺を優しく撫でていた手の動きが鈍くなり、少しして止まってしまった。

目を開けると、幼子は俺に寄りかかるようにして眠っていた。

自分の体を確認するが、スッキリして痛みもない。

……なにかの回復魔法か？

起こさないようにゆっくり動きながら顔を覗くと、柔らかそうな白い肌に、サラサラの黒い髪がかかっている。規則正しく上下する小さい体がやけに愛おしい。

この閉じた瞳はどんな色だろう？　その瞳はなにを映すのか？　俺を見てどう感じるだろうか？

そんなことを考えながら、しばらく飽きることなく見ていたら、長いまつ毛がピクッと動いた。

次いで、眉間にシワが寄る。
シワをなくそうとペロペロと舐めると、幼子はクスクスと笑って「じん、やめてぇ～。くしゅぐったいよ～」と俺を撫でてきた。
嬉しい気持ちが抑えられず、更にペロペロ舐める。
次の瞬間、幼子が瞼を持ち上げ、待ち望んでいた瞳が現れた。黒く澄んだ瞳が俺を映す。
目が合うと、彼女はびっくりしたのか硬直してしまった。
しかし、嬉しさが上回り構わず舐めていると、幼子は恐る恐るこちらに手を伸ばし、また優しく撫でた。
「かわいいね」
可愛い笑顔を向けられ、愛おしさが胸いっぱいに広がり、思わずその体を抱き寄せる。
「ふふふ、くしゅぐったい」
この笑顔をずっと近くで守っていたい。そう強く思うと、俺と彼女の間で『従魔の契約』がなされた。
従魔の契約では、使役者と従魔の魂が結ばれる。これにより、意思の疎通ができ、従魔は使役者の危機を一早く察知したり、力が増大したりする。
しかし、この契約は互いの魂が惹かれ合い、認め合わないと結ぶことはできない。
契約がなされた今、幼子も自分を受け入れてくれたと思うと、胸の奥が熱くなった。ずっとこの時を待っていた気がする。

不思議そうに胸をさする幼子に話しかけると、大きい瞳を更にまん丸にした。
「いま、あなたがしゃべったの？」
たどたどしい喋り方で話しかけてくる。会話できることが凄く嬉しく、ゆっくり頷いた。
お互いに惹かれ合ったので契約ができたこと、それによって会話ができるようになったことを伝えるが反応がない……。望まぬ契約だったのかと寂しく思っていると、
「ちがう、ちがう、いやじゃないよ。びっくりしちゃったの」
幼子は慌てた顔で首を横に振る。その後も拙い言葉で一生懸命に話してくれる。
頭の中で話せると伝えると、今までの拙い言葉ではなくしっかりとした挨拶がかえってきた。
なぜ挨拶……？
不思議に思い聞いてみると、なんとなくと可愛く首を傾げ、小さな舌をペロッと出した。
あまりの可愛さに思考停止してしまう。これは本格的に守らねば！
まずは結界を張るべきかな、と色々考えていると幼子が話しかけてくる。
幼子の名は『ミヅキ』というらしい。名前を聞くとなぜか懐かしい気持ちが溢れる。
この気持ちはなんなんだろう。ずっと昔からミヅキを知っていたような不思議な感覚だ。そして自分の名前も聞かれる。
今までずっと一人でいて、名前など使うことはなく、種族名のフェンリルと呼ばれることがほとんどだった。
どうせならミヅキにつけて欲しいと頼むと、ミヅキはうっすらと瞳に涙を溜めてしまった。

泣くほど嫌だったのか……
落ち込む俺に、彼女は笑って優しく頭を撫でながら、泣いてしまった訳を話してくれる。
前に一緒にいた子を思い出し泣いてしまったのだと……従魔だろうか？
ミヅキは寂しげに瞳を揺らしながら、大事な家族だったと言った。そして、俺に名前をくれる。
ミヅキの家族だった奴と同じ名の色、そして俺の光に反射して耀く毛並みから『シルバ』と。
知らない奴の名などいつもなら気に食わなく思うだろうが、不思議と嫌ではない。それどころか、昔からその名であったかのように自然と馴染んだ。
いい名をありがとう、とミヅキに礼を言う。
そして『銀』。お前の名を受け継ぎ、俺がミヅキを必ず守ると誓おう。

二　魔法

【じゃあ、改めてよろしくね。シルバ！　従魔の契約だけど、なにかルールとかしてはいけないこととかあるの？】
【まぁ細かいことは大丈夫だ。ミヅキに命令されて嫌なことなどないからな。ミヅキは俺の主人だ、なにがあっても必ず守ると誓う】
シルバに聞いてみたら、彼は自信たっぷりに胸を張り答えた。

【うーん、よく分からないけどあんまり無理しないでね。今は一緒にいてくれるだけでも嬉しいよ】
そう言って笑うと、シルバも嬉しそうに尻尾を振る。
【しかしミヅキは見た目は幼子だが、話すと大人のようだな】
【えっ！　だって私、お酒も飲める大人だもん】
私の言葉に、シルバは小首を傾げる。
【人族の細かな年齢は分からぬが、ミヅキの見た目は赤子みたいだぞ】
そういえば手足が小さくなっていたなぁ。水辺に向かい顔を水面に映すと、そこには前世の面影がうっすらある、可愛い女の子が映っていた。
「にゃっ！」
びっくりして思わず声が出てしまう。
【なんか大分可愛く補正されてる……年齢も三、四才かなぁ～。これじゃあ話しづらいわぁ……中身と外見が違うけど……シルバ、本当に契約して大丈夫だった？】
シルバが見た目を基準にして契約したのなら、立派な契約違反になっちゃいそう。
【俺はどんな姿のミヅキでも大丈夫だ。ミヅキの見た目ではなく、魂の部分で惹かれているからな。もちろんその姿も可愛くて好きだがな】
なんてどこぞのイケメンみたいなセリフが飛び出した。
ヤバい！　見た目狼なのにすっごいイケメンに見える！　人だったら間違いなくもてるだろうな。

キザなことをサラッと言うイケメンフェンリルに頬が少し染まるのを感じながら、ありがとうとお礼を言うと、彼は満足そうに頷いていた。
【頭で考えてる分にはスラスラ言葉が出るけど、声に出すと年相応の話し方しかできないみたい】
【その見た目で大人顔負けで話していたら、よからぬ輩に目をつけられそうだ。年相応の振る舞いをしたほうがいいだろう】
困ったなぁと思っていたが、そう言われなるほどと頷く。と、その時、
「くぅ～」
お腹から可愛い音が響いた。
あ～そう言えばなにも食べてないな。お腹空いた……
色々あってすっかり忘れていたけれど、気が付いてから水しか口にしてない。意識すると余計にお腹が空いてくる。
【ふふ、腹が減ったのか？　可愛い音だな】
シルバに指摘され、恥ずかしくなり、お腹を押さえて下を向く。すると、鼻先をお腹に近づけて掴まれと言われる。
言われるまま顔にギュッと抱きつくと、ポイッと背に乗せられた。
ふわふわの背は気持ちよくて、思わず頬ずりしてしまう。
【しっかり掴まっていろよ】
そう言うとシルバは走りだした。凄い速さなのだろうが振動も、風圧も感じない。横を流れる景色だけがみるみるうち変わっていく。
【全然風を感じないし落ちる気配もないね】
【ミヅキの周りに結界を張っているし、障壁魔法もかけている。それに俺がミヅキを落とすわけないだろう】
「まほー！」
魔法と聞いて思わずテンションが上がる。
【魔法があるの？　シルバは魔法が使えるんだ！　凄いね！】
背中をゴワゴワ撫でながら凄い凄いと褒めると、シルバは嬉しそうに尻尾を振る。
【他の魔法も使えるぞ……見るか？】
【見たい！　見たい！】
嬉しそうに照れながら聞いてくるシルバに、私は声を弾ませて答える。しばらくして、シルバは小高い崖の上で止まった。
【じゃ、行くぞ！　風牙斬】
シルバが前脚を振り下ろしながら叫ぶと、突風が鎌鼬のように前にそびえていた森を抉った。
【えっ……え……えええええええー！　なにあれ！　大分先まで森が抉られてるよ！　シルバ、なにしたの！】
【なにってミヅキが見たがった魔法だぞ。今のは風魔法の風牙斬だ。そんなに強くやったつもりはなかったが、ミヅキに見せるのに少し張り切ってしまったな！　それとも、もっと派手なほうがよ

かったか？】
私はぶんぶんと首を振る。もっと凄い魔法もあるんだ……ちょっと怖いな。
とりあえず見せてもらったし、シルバが褒めて欲しそうな顔を向けているので思いっきり撫で回す。次はもっと抑えてやってねと忘れずに言っておいた。
少し移動して開けた場所で下ろされる。
少しここで待っていろと言われたので、そこら辺の石に腰掛け待っていると、シルバが果物を咥えて戻ってきた。
【ミヅキ、この実は美味いぞ。食べてみろ】
シルバが持ってきた果実は、見た目が桃みたいだった。
【桃だぁ～】
私は喜んで受け取り、その匂いを嗅ぐ。するとフワッと桃のいい香りがした。
小さい手で皮を剥きカブっと頬張った瞬間、ジュワッと桃の果汁が溢れた。
あまりの美味しさに夢中になり、口いっぱいに桃を頬張ってしまう。小さい口の周りは果汁でびちゃびちゃだ。
そんな私を見て、シルバがペロペロと舐めて拭き取ってくれた。
【ありがとう！　シルバも一緒に食べよ】
残りの桃を差し出したが、全部食べろと言われる。しかし、小さい体では一つだけでお腹がいっぱいなのだ。

【お腹いっぱいだからシルバが食べて】
ニコッと笑って、もう一度桃を差し出す。シルバは【そうか？】と言って、尻尾をパタパタさせながら、一口で食べてしまった。腹も膨れたので、今後のことを考える。
【ふー、お腹いっぱい。さてこれからどうすればいいかな？　どっか市とか町とかあるのかな？】
【し……はよく分からんが町や村、都もあるぞ。俺はあまり近づかんが……】
【そっか……都とかは面倒そうだから町とか小さいところがいいかな？　ギルドみたいなのもあるのかな？　従魔がいるなら冒険者や勇者もいそうだけど……そうすれば私と契約してるし、シルバも一緒に行けるよね？】
【ミヅキは本当に大人なのだな……ギルドは確かにある。人族のことはあまり詳しくないが、俺は討伐対象になったから間違いないな】
【討伐！　なんで⁉】
こんなに優しくてふわふわで可愛いイケメンフェンリルを討伐なんて許せん！　プンプンッと怒っていると、シルバが気まずげに顔を逸らした。
なんか銀が悪いことをした時に誤魔化す仕草に似てる。
じっとシルバの顔を見ていると、ペロペロと顔を舐めてきて誤魔化しだした。
またいつかきっちり聞いてみるか……
可愛い仕草に問い詰めるのを諦める。それから、ここに居ても埒が明かないので、とりあえず安全そうな町を目指すことにした。

シルバには軽く前世について話してみたが、あまり気にしていなそうだ。ただそれを他の人に話すのはやめておけと言われたので、二人だけの秘密にすることになった。
シルバの案内でよさそうな町を見つけたが、問題はどうやって町に入るかだ。
町には門番が立っていて身元を確認されるらしい……見た目は子供、頭脳は大人？　身分証なし！　フェンリル連れ！　怪しさ満点！
……絶対入れる気がしない。
シルバはそのまま行けばいいと言うが絶対揉めるよー。フラグ立ちまくりだよ！
揉めたらどうにかするとか言うけど、絶対力技だよね？
さっき見せてもらった魔法を使ったら、町がなくなっちゃいそうだよ……
ふーと思わずため息が出る。町から少し離れた場所で作戦会議を開くが、いい案は一向に出ない。今日はとりあえず野宿かなぁ、なんて考えていると、シルバがすっくと立ち上がり私を隠すように前足の間に挟んだ。
次の瞬間ガサッと音がして、武装した人達が数人、私達の周りを取り囲んだ。
「おい！　そこの子、無事か？」
武装したうちの一人が、こちらに向かって叫ぶ。
……私のことだよね？
キョロキョロ周りを見るが、皆の視線が私に集中している。これはなんか勘違いされているような気が……。シルバはシルバで威嚇するような唸り声をあげる。

【シルバ、大丈夫だから唸るのやめて】
とりあえず落ち着かせようと思い、立ち上がってシルバの隣に立つ。
「だいじょうぶです。このこはわたしのじゅうまです」
一人前に出ている大きいお兄さんに向かって、警戒されないようににっこりと営業スマイルで笑って見せた。

三　幼子

私がシルバに手をかけながら話している様子を見て、お兄さんは手をすっと上げ合図をする。それに合わせて、周りの人達が武器を下ろした。
まだ警戒気味だが、皆お兄さんの後ろに集まり、じっとこちらを窺っている。
「そちらに少し近づいてもいいか？」
お兄さんが聞いてくるので、私はシルバに大人しくおすわりをさせる。
途端に「おおっ！」と、武装した人達がどよめいた。
【ミヅキに危険があれば構わず殺るぞ】
シルバがサラッと怖いことを言う。
「わたしにきがいをくわえなければ、だいじょうぶでしゅっ」

【あ、噛んだ……】
すると、先程より皆のヒソヒソ声が大きくなった。数人はプルプル震えている。
恥ずかしい。そんなに笑わなくてもいいのに……
恥ずかしさのあまりちょっと目がうるうるしてしまう。
シルバが小さく唸るとピタッとざわめきが止まった。
お礼の気持ちを込めて撫でながら笑いかけると、またざわつきだすが、シルバがキッと睨みをきかせる。
「うおっほん。じゃ少し話を聞かせて欲しいが大丈夫かな？」
前にいたお兄さんが少し近づき話しかけてきた。よく見るとすっごくいい体格で、まあまあイケメン。三十前位かな、と失礼ながらじっくり観察させてもらう。
じっとお兄さんのことを見つめていると、切れ長の目元が緩み、へらっと相好が崩れた。
あれ？　なんかちょっと残念な見た目になっちゃった。
まぁとりあえず話をして町に入りたい。
こくんと頷くとお兄さんはなぜか頬を染めて、口元を押さえている。後ろでは機嫌が悪くなったのか、シルバがまた小さくグルッと鳴いていた。
「おにいしゃん、おはなしだいじょうぶですよ」
「あぁ、すまなかった。そちらの獣はお前と契約している従魔で間違いないか？」
構わずこちらから話しかけると、彼はチラッと後ろのシルバを見遣る。

「こちらの言ってることを理解できてるようだが……お前、年はいくつだ？」
私は答えに困って、シルバに【助けて〜】と視線を送った。
【シルバどうしよう。何才って言えばいいかな？】
【本当の年齢は分からないんだ、素直に分からないと言っておけ。相手に都合よく解釈してもらおう】
「わかりゃない……」
騙してることが申し訳なく、俯き気味に答える。
すると、お兄さんは慌てた様子で返事をした。
「い、いや別に責めているわけではない。受け答えもできるし四、五才くらいだろうが……実は俺達はフェンリルの目撃情報を受けて、ここを調査しに来たんだ。おまえがフェンリルに捕らえられているのかと思い、救出しようとしたんだが……」
「だいじょぶです。シルバなかよし！　わたしをまもってくれる！」
やっぱり勘違いして私を助けてくれようとしてたんだ。危険はないよって気持ちを込めて、警戒させないように笑ってみせる。
「お、おお、そうか。それで親はどこにいる？」
親？　あぁ、幼子だから親といると思ったのか……
とりあえず分からないとプルプルと横に首を振る。
「きがついたらもりにいたの。シルバがたすけてくれて、ここまでつれてきてくれたの」

「そうか……こんな可愛い幼子を捨てたのか……」
お兄さんがなにか言ったがよく聞こえなかった。見ると、なにやら神妙な顔をしている。
やっぱりこんな怪しい子供は町には入れたくないよね……このまま誤魔化して立ち去ったほうがいいかな。
「お前さえよければ町に来るか？　独り立ちできるまで面倒を見てやるぞ」
落ち込んでいたら、唐突にお兄さんがそんなことを提案してきた。他の人達が血相を変えて彼に詰め寄っている。
勝手なことを言い出したお兄さんを責めているのだろう。
不安になってシルバを見上げる。
なぜかシルバは満足げにふふんっと鼻で笑っていた。
【やっぱりミヅキは可愛いからな】
なんなんだ？　と首を傾げていると、お兄さん達の話し合いも終わったようだ。
「話し合った結果、俺が責任をもってお前の面倒を見てやることになった！　俺はベイカーだ。よろしくな」
お兄さんの名前はベイカーさんというらしい。
「わ、わたしはミヅキです。ほんとにいってもいいですか？」
ペコッと頭を下げて、迷惑じゃないかなぁと、眉尻を下げてベイカーさんを見上げた。
ベイカーさんはそんな私を見て、また口元を押さえて横を向いてしまった。ああ、やっぱり迷惑

だったんだ……
悲しくなり、目の奥がツンとして泣きそうになる。
「あ、ああすまんっ。違うんだ！　ミヅキはまだ子供なんだから大人を頼っていいんだぞ」
あわあわと言うベイカーさんの後ろで、他の人達もうんうんと頷いている。
「ありがとうございます……」
優しい人達に会えてよかった……ほっとして目に涙を溜めながらお礼を言った。ベイカーさんがそっと頭を撫でながら優しく笑いかけてくれる。
「グゥルル」
シルバが低く唸りながらベイカーさんを押しのける。ベイカーさんは急に出てきたシルバに驚いて、ビクッと手を引っ込めてしまった。
「シルバ、メッよ！」
シルバの失礼な態度を注意すると、彼はシュンと耳を下げる。
そんな私達のやり取りを見て、ベイカーさんはニカッと爽やかに笑って褒めてくれる。
「本当に従魔なんだな！　幼いのに凄い才能だ。テイマーとして十分食べて行けると思うぞ。じゃあ、とりあえず町に向かいながら少し話をしよう」
ベイカーさんは他の人達を先に帰らせ、このことを報告するように指示を出す。そしてこちらに向き直り、頬を持ち上げ微笑んだ。
「これから町に着いたらまず冒険者ギルドに行ってもらう。そこでミヅキは冒険者として登録する

が問題ないか？」
「ぼうけんしゃってなにをすればいいの？」
「冒険者のやることはピンキリだ。一番簡単なものだと薬草集めとかだな。それならミヅキにもできるだろう。とりあえず登録して身元を証明するものを作らないと、町に滞在することができないからな」
ふんふんと頷きながら聞いていると、ベイカーさんが嬉しそうに続きを話してくれる。
「別に冒険者になれってことじゃないから安心しろ、大きくなったら好きなことをすればいい」
そう言いながら頭をぽんぽんっと優しく撫でる。
「じゃ行くか！　ちょっと遠いから抱っこしてやろうか？」
ベイカーさんが手を差し出してくれるが、
【ミヅキ乗れ】
シルバが顔を近づけたので、反射的にギュッと抱きつく。そしてポンッと背に乗せられた。
「シルバがはこんでくれるからへいきー」
ニカッと笑うと、ベイカーさんは「そ、そうか……」と肩を落として歩き出した。
シルバはその後ろを悠々とついていく。私はそんなベイカーさんの様子には気付かずシルバの毛並みを堪能していた。

町に着くと門番はすでに報告を受けていたのか、ベイカーさんと挨拶をした後、すんなり通してくれた。
シルバを見てびっくりしていたが、幼子が背に乗っていることで従魔と認識したようだ。
町に入りしばらく歩いて行くと、民家とは違う大きな建物が見えてきた。
「あれが冒険者ギルドだ。門からの道順は覚えたか？」
ベイカーさんがギルドの建物を指差しながら聞いてくる。
その時になってやっと、周りの建物が気になってキョロキョロしていて、道順など覚えていなかったことに気が付いた。
【俺が覚えているから大丈夫だ】
シルバがこちらをチラッと見た。
なんてできる子！　さすがイケメンフェンリル！
「シルバがおぼえたー」
うちの子凄いだろっと親バカな感じで胸を張る。
「もしかして……フェンリルと意思疎通がとれるのか？」
ベイカーさんがびっくりした顔をしながら聞いてくる。
「じゅうまのけいやくをしたからおしゃべりできるよー」
どんな人でも従魔と契約したら会話ができると思い、軽い気持ちでそう言うと、ベイカーさんは呆然としてしまった。
あれ？　どうしたのだろう。

シルバにベイカーさんのそばまで行ってもらい、つんつんと突いてみると、彼はハッと覚醒した。
「いや……従魔の契約をしても獣が喋れなければ会話はできんだろう。つまりそのフェンリルは言葉が理解できるほど知能が高いんだな……」
ベイカーさんがブツブツ呟いているが、今は目の前のギルドに意識が行く。ギルドの中に入ると、視線が集中した気がした。
不安になり思わずシルバの毛をギュッと握る。
ベイカーさんはそんな視線など気にせずどんどん奥に進んでいき、窓口みたいなところに座っているお姉さんに話しかけている。
こっちに来いと手招きをされたので、シルバから降りてベイカーさんに近づいた。
「ここで登録をするんだ。台に届かないから持ち上げるぞ」
そう言われて、ひょいと抱きかかえられた。
「じゃあ、こいつの登録をお願いする。名前はミヅキ、年はまぁ四、いや五才で、職業はテイマー。従魔は後ろのフェンリルだ」
ベイカーの言葉をお姉さんが紙にサラサラと書いていく。その紙を持って奥の扉に入っていくと、しばらくして一枚のカードを手に出てきた。
「こちらのカードに血を一滴お願いします」
お姉さんがカードを出しながらにっこり笑って言ってくる。
血……えっとどうやるんだ？

やり方が分からずにチラッとベイカーさんを見上げた。
「ナイフとかで指先をちょっと刺して出したりするんだが……大丈夫か？」
彼は心配そうに聞いてくる。そのくらいなら大丈夫だと思い、指を差し出した。
「俺がやるのか!?」
自分が刺すなど思いもよらなかったのか、びっくりしている。でも、ちょっとこの小さい手でナイフを持つ自信はないしお願いしよう。
「おねがい」と上目遣いで目を潤ませる。我ながらあざとい。うん、すみません。
ベイカーさんが悶えながらなにやら葛藤している。縋るようにチラッとシルバのほうを見ると、プイッと顔を逸らされていた。お前がやれって感じだね。その後、お姉さんを見るけど……
「嫌です」
ハッキリと断られた。まあ、幼子の手にナイフ刺すのなんて流石にやだよねー。
「ベイカーさん、おねがいします。いたくてもへいきだから」
にっこり笑って指を更に差し出すと、ベイカーさんが渋々ナイフを取り出した。
「フレイシア、回復薬を用意してくれ」
ベイカーさんが受付のお姉さんに指示する。すかさずお姉さんは笑みを浮かべたまま、小さな瓶を見せた。既に用意しているとはできるお姉さんだ。
ベイカーさんは、私の手を握るとゴクッと唾を呑む。
えっ、そんなに覚悟がいるの……どうしよう、ちょっと不安になってきた。

ベイカーさんの緊張が私にまで移る。そして、彼の右手が動いたと思ったら、指先にピリッと小さな痛みが走った。
「は、早くしろ！」
ベイカーさんが慌てた顔でフレイシアさんに私の指を差し出す。フレイシアさんに手を取られ、カードの上に指の先を軽く押されて血を垂らした。カードに血がスーッと染みていく。
彼女が指先に用意していた瓶の液体を少しかけると、みるみるうちに傷が塞がった。
「ありがとございます」
「いい子ね。よく頑張りました」
フレイシアさんにお礼を言ったら、優しく頭を撫でてくれた。こちらの人は頭を撫でるのが好きだなぁ、なんて考えていると、ベイカーさんが傷の具合を確認してくる。
「傷痕、残ってないよな……」
じーっと指を見ている。別に指先に痕が残ったって気にしないのに。
【ミヅキ、指先を見せろ】
シルバまで傷痕を見たいと言いだした。ベイカーさんに言ってシルバのそばまで行き、指を差し出すとペロペロと指を舐められた……なんで？
「では、こちらがミヅキ様のギルドカードになります。身元確認の際に必要になりますので、なくさないようお願いします。ギルドのシステムについて説明いたしますか？」
「あーそこら辺は俺が説明しておくから大丈夫だ」

フレイシアさんの問いに、ベイカーさんは首を横に振る。
「了解です。あと、ギルドマスターに会って行かれますか？」
「ミヅキも今日は疲れていると思うから、明日改めて顔を出すと言っておいてくれ」
「はい。それと、従魔に装身具をつけていただきたいのですが」
フレイシアさんは頷いた後、申し訳なさそうにシルバを見た。シルバはあからさまに嫌そうな顔になる。
どんな装身具をつけるのか聞くと色んな形がありなんでも大丈夫とのこと。
見せてもらうため、さっそくテーブルに並べてもらった。
首輪に腕輪、アンクレット、イヤリング、ネックレスと種類も大きさも様々だ。
【シルバはどれがいい？　それともつけるのはやっぱり嫌？】
シルバの顔を覗くと、じっとなにかを見ている。
目線の先には赤い首輪があった。その首輪は愛犬の銀がつけていた首輪によく似ていた。
銀を思い出しながらそっと手に取る。銀になら首輪で丁度いいが、シルバは脚につけることになりそうだ。
【シルバ、これどうかな？】
【俺には小さそうだな】
【シルバがつけるなら脚にだね。それとも違うのがいい？　嫌なら無理してつけなくてもいいんだよ】

【ミヅキのためなら大丈夫だ】
シルバはペロッと頬を舐めて、前脚を差し出した。私は手にしていた赤い首輪をシルバの脚につける。首輪はフワッと淡く光り、シルバの脚にフィットした。
【大丈夫？　邪魔じゃない？】
【いや平気だ。不思議と違和感がない】
【黒い毛並みにとっても似合ってるよ】
シルバは満足そうに首輪――もとい腕輪を見ている。嫌がっていなくてよかった。
「じゃあ行くか」
ベイカーさんは、無事に装身具をつけ終えるのを確認すると出口に向かった。私はもう一度フレイシアさんにお礼を言って、ベイカーさんの後についていく。
「俺の家までまた少し歩くから、フェンリルに乗せてもらえ」
扉の外で待っていてくれたベイカーさんは、そう言ってシルバの背に乗せてくれる。そして再び歩き進めること十数分、町の外れに佇むちょっとおんぼろの小屋が見えてきた。
もしかして、あれ……？
ベイカーさんは案の定その家に入る。
「ライト」
家に入るなり、ベイカーさんがそう唱えた。すると、瞬く間に部屋の中が明るくなる。
「しゅごーい」

これも魔法だよね！　感激してベイカーさんを見上げた。
「ライトの魔法が珍しいのか？　誰でも使える生活魔法だぞ」
「まほう。わたしにもつかえる？」
是非とも使ってみたいが、どうやったらできるのだろう。
「魔力があればできるはずだ。ステータスは見たことあるか？」
ステータス？　そんなものが見られるの？　なんて考えていると、目の前に透明のパネルのようなものが現れた。

《名前》ミヅキ
《職業》テイマー
《レベル》1
《体力》50
《魔力》10000
《スキル》回復魔法　水魔法　火魔法　土魔法　風魔法
《従魔》シルバ（フェンリル）
《備考》愛し子　転生者　鑑定　???　???

おお！　なんか出た！

なんか色々気になることがあるが……とりあえず魔力がある。魔法が使えそうだ！
「すてーたすでた！　まりょくあるからまほーできる？」
首を傾げて聞くと、ベイカーさんはヘラッと笑った後に、ギョッとした顔になる。表情が忙しいなぁ……
「なっ、なんて言った？　ステータスが出た？」
なんか慌てている。うんと頷くと、彼は今度は頭を抱えだした。
「あのなぁ……普通ステータスは自分では見えん。神官が鑑定をして確認するものなんだ」
「かんてーある」
ステータスに書いてあったもん。
「そ、そうか……じゃちょっと俺を鑑定してみろ」
ベイカーさんを見ながら（鑑定）と強く念じる。

《　名前　》ベイカー
《　職業　》Ａ級冒険者　剣士
《　レベル　》89
《　体力　》３６８２
《　魔力　》２５３９
《　スキル　》火魔法　風魔法　剣技

――これより表示できません――

「ベイカーさん、えーきゅーぼうけんしゃってでてます。れべる89！　すごいです」
でも、スキルの後が表示できないと出ている。
「なんか、すきるまでしかみれません」
見た通り伝えるとベイカーさんが目元を手のひらで覆い、天井を仰ぐ。
「あ……うん。本当に鑑定があるんだな。表示されないところは隠匿してあるんだ。見られるとまずい項目なんかは隠す奴が多いぞ、ミヅキも隠匿したほうがよさそうだな」
この様子だと備考の部分は全部見せたらまずそうだ。
転生者って書いてあるし……その前に愛し子なんてのもある。
そんなのバレたら……面倒くさそう、どうせなら私のことは、ほっといてほしいなぁ……
「まぁ、魔法やら鑑定のことはとりあえず明日ゆっくり聞く。今日はもう疲れただろうから休め」
そのまま奥の部屋に連れて行かれる。奥は寝室になっているようで、ベッドが一つと小さい棚が置いてあるシンプルな部屋だ。
「少し汚いが我慢してくれ」
野宿するつもりでいたからベッドで寝られるだけ全然ましだ。しかしベッドが一つしかないとなると、ベイカーさんの寝るところが気になる。
「ベイカーさんは？」

「俺はあっちのソファーで寝るから大丈夫だ」
そんな大きな体でソファーに……どう考えても小さい私がソファーで寝るべきだ。
「わたしがあっちでいいよ」
ソファーを指差してベイカーさんを見上げたが、子供が遠慮するなと言われ、結局ベッドに寝かされる。大きな手で頭を撫でられると疲れていたのか瞼が重くなる。
【シ……ルバ……】
薄れる意識の中、手を伸ばしシルバを呼ぶと、シルバのふわふわの毛が触れた。その温もりに安心して、私はそのまま意識を手放してしまった。

◆

俺がギルドマスターに呼ばれてギルドに行くと、数人の顔見知りの冒険者が集まっていた。
なにやら町から数キロ先の森が、広範囲にわたって抉られ破壊されたらしい。数人のグループを作り調査して欲しいとのことだった。
A級と一番位の高い俺がリーダーとなり調査に向かう。
現場に着くと酷い有様だった。
高度な風魔法による攻撃の跡が数キロにわたり続いている。現場の確認を終え、町に戻りながら周囲を警戒していると、仲間の一人から大きな黒い獣に捕まっている子供を発見したと報告を受

けた。
陣形を整え対象に近づき……その姿を確認する。
あれはまずい。フェンリルだ。どうしてあんな伝説級の魔獣がこんなところに。
黒い獣と聞いたからグレートウルフあたりかと思ったが……クソッ！　このメンバーだと皆殺しもあり得る。
どうにか子供だけ助けて撤退できないかと様子を窺っていると、フェンリルがこちらに気付き威嚇してきた。
とりあえず子供の無事を確認するため声をかける。子供はフェンリルの隣に立ち、フェンリルが自分の従魔だと言う。
こんな子供が従魔を従えているのにも驚きだが、その容姿にも驚かされた。
ここでは珍しい黒い髪。少しやせ細っているが白い肌は美しく透明感がある。大きな瞳も同じ黒色で、小さな赤い唇と絶妙なバランスを取っている。間違いなく将来は美人になるだろう。
あどけなく、とても可愛らしい。
にっこり笑いかけられ、冒険者の何人かがあまりの愛らしさに悶えそうになっている。舌っ足らずな喋り方がまたその可愛さを引き立てていた。
とりあえず話を聞かなければと近づいていいか尋ねると、危害を加えなければ大丈夫だと言う。
あの子が喋るたびに後ろの冒険者達がざわつく。悶えるのを止めろ！　皆、可愛い可愛いとうるさい。

こちらがザワザワしているので不安になったのか、子供が目に涙を溜めて不安そうにしている。するとフェンリルが不機嫌そうに唸る。
流石に皆、ピタリと黙った。
子供は「ありがとー」とフェンリルを撫でながら微笑んでいる。フェンリルの様子を窺いつつ近づくと、子供はじっと上目遣いでこちらを見ている。近くで見るとますます可愛らしい。
黒い瞳は宝石のように煌めいていて、黒い髪もふわふわと柔らかそうだ。つい顔の締まりが緩くなり、ヘラッと笑ってしまう。
……まずい。可愛い!!
思わず口元を押さえる。さっき悶えていた連中の気持ちがよく分かった。
年齢を聞くが、分からないと下を向いてしまった。声にも力がなくなってしまったので、慌ててなぐさめる。
四、五才くらいに見えるが、受け答えと言葉の理解度からもう少し上かもしれない。子供はここまで来た経緯を説明しながら、フェンリルのことを本当に信頼しているのか、柔らかい笑みを浮かべながら仲良しだと言う。
俺はその笑顔と言葉を信じてみることにした。
親とはぐれたのかと尋ねると、気が付いたら森にいたと返ってきた。
その前の記憶がないらしく捨て子の可能性もある。こんな可愛い子を捨てるなど考えられないが、育てきれなくなった子を森に捨てることはよくあることだった。

とにかく怪我もなく生きていてくれてよかった。ここからは俺が面倒を見てもいいと思い、町に来ないかと聞いてみる。
すると後ろの奴らがザワついた。ずるいやら俺が代わりになどほざくが、譲る気はない！
そして少しの話し合いの結果、見事俺が保護者権を勝ち取った。
まぁ、ランク的にも俺に逆らえないしな！
名前を聞いた後、不安そうな様子について尋ねたら、ついて行くことを申し訳なく思っているという。
こんな小さな子がなにを遠慮するのか……そうせざるを得ない環境にいたのかと思い、幸せにしてあげたいと決意していると、ふいに上目遣いに顔を覗かれる。
あまりの愛らしさに叫びそうになるのを、口を押さえて必死に耐えた。
他の奴らも同じようだ。その様子にミヅキは迷惑をかけていると勘違いしてしまった。これはいかん！　いい加減、悶えるのを止めなければ！
これからは大人を頼っていいんだと伝えると、嬉しそうにお礼を言った。
思わず手が出て頭を撫でる。サラサラでふわふわの髪の毛が心地よい。いつまでも撫でていたいが、周りから殺気を感じるし、従魔のフェンリルが間に入り引き離そうとしてくる。どんだけミヅキが好きなんだ……
ミヅキが焼きもちをやいたフェンリルに軽く注意をすると、フェンリルは目に見えて落ち込む。どうやら本当にミヅキが主人らしい。これなら町に行っても、ミヅキになにかまずいことが起きな

い限り暴れることはないだろう。
しかし、こんな子供がフェンリルを従魔にできるとは凄い才能だ。あんまり目立つと悪い人間に利用されかねない、そこも注意してやらなければ。
他の奴らを先に町に帰し、ギルドに報告するように伝える。ついでに門番にも言付けを頼んでおく。ミヅキにはこれから町に向かいギルドで冒険者として登録することを伝えると、少し不安げな顔になる。
そこで無理に冒険者としてやっていく必要はないことを伝えると、少し表情を和らげた。
町に向かう道中、子供の足では大変だろうからと抱っこしてやろうと言う。
決してしたい訳じゃない！　大変だろうからだ！　ちょっとは抱っこしてみたいとは……思っているが……
しかし見事にフェンリルに邪魔をされる。
まぁしょうがない……全然、残念じゃないから……くっ。
町の門に到着し、門番には事情が伝わっているらしくそのまま通される。流石にフェンリルには少しビビっていたが。
町の中を進みギルドが見えて来たところで、ミヅキにここまでの道順を覚えたか聞くと焦った顔をした。
そんなすぐに道を覚えられるわけないので大丈夫だと宥めようとすると、フェンリルが覚えたと言う。まさかフェンリルと話せるのか聞くと、従魔の契約をしてるから喋れると笑顔を見せる。

……そんなわけあるか！
確か、通常より相手の気持ちが分かる程度のはずだ。まず普通、魔物は喋れない。
伝説級やドラゴンなど知能の高い者は喋れるようだが、つまりフェンリルが伝説級の魔獣だというのが改めて証明されたわけだ……まぁミヅキにぞっこんみたいだから大丈夫……だよな。
ギルドに到着し、受付嬢のフレイシアのところに行く。ミヅキが注目を浴びてしまっているのでサッサと済ませて早く休ませてやろう。
ミヅキを呼び、台が高いので抱きかかえてやる。リベンジ成功！　幸せだ。周りが五月蝿いが無視を決め込む。
フレイシアに、ミヅキの名前、年齢、職業を伝えて従魔のフェンリルを登録してもらう。
フレイシアが一旦奥に行き、カードを作って戻ってくると次は血の登録だ。これをしないと本人確認ができないし、偽装防止にもなるので重要だ。
ミヅキは血をどうやって出すのか分からないようでこっちを見てくる。ナイフなどで指先に刺し血を垂らすことを伝えると、ずいっと指を差し出してきた。
えっ、俺がやるの？　いやその可愛い手に傷をつけるのは流石に嫌だ！
だが目をうるうるさせ、お願いと言われると……どうしよう。チラッとフェンリルを見ると、顔を逸らされた。
おい！　お前従魔だよな！　ご主人様の指をちょっとかじってって……無理か。
今度はフレイシアを見る。だが、なにも言ってないのに嫌だと言われてしまう。

ミヅキは俺に的を絞ったのか、上目遣いにお願いしますと指を差し出す。渋々ナイフを取り出しミヅキの手を取る。とても小さい手だ。
子供の手とはこんなにふわふわで柔らかいのか……この可愛らしい手に傷痕でも残ったら……
周りからも上手くやれよと念が送られてくる。ならお前らがやれよ！
回復薬の確認をして覚悟を決め、最小限の力でナイフの先を指にかすめる。
よし！　上手くできた。
すぐさまフレイシアにミヅキの手を渡す。フレイシアはミヅキの指先を軽く押して血をカードに垂らすと、傷口に優しく回復薬をかけた。
素早く傷痕を確認するが、綺麗に治っているようだ。
ミヅキは平気そうにしていたが、フェンリルが指先を舐めていた。消毒のつもりだろうか？
登録したカードを貰いギルドを出ようとすると、従魔の装身具をつけるように言われた。
ミヅキは赤い首輪を選んだ（フェンリルがつけたらもはや腕輪だが）。プライドの高いフェンリルがつけられるのかと思ったものの、ミヅキに装着させてもらい満足そうだ。
ギルドでの用事を済ませると、ミヅキも疲れているだろうからと家に向かうことにした。
家に着いて中に入り、ライトの魔法で明かりをつける。ミヅキがなぜか興奮している。
どうやら魔法が珍しいようだ。誰でも使える生活魔法なのに……
自分も使いたいと言ってくるので、魔力があればできると答える。ステータスを確認しないと魔力があるか分からないからな。

ステータスを見たことはあるかと聞くと、ステータスが出て魔力があると喜んでいる。
喜んでいる姿が可愛いなぁ……はっ？　ステータスが出たってなんだ？　ステータスは神官にならないと見られないはずなのに。
どうやらミヅキは鑑定のスキルを持っているらしい。ものは試しと俺を鑑定してもらう。見事に的中。本当に見えているようだ。
なんでこう色々やらかすんだ……ちょっと俺にも考える時間が欲しい……
一先ず今日は休めと、奥の部屋のベッドを使うように言うと俺がどこで寝るのか聞いてくる。
心配しなくても一緒に寝ねえよと思っていたが、どうやら自分が俺のベッドを取ってしまうことを心配しているようだ。
なんていい子だ。気にするなとベッドに寝かせて頭を撫でてやると、だんだんと瞼が閉じていく。
そして、フェンリルを抱きしめたと思ったら、パタッと寝てしまった。
フェンリルも愛おしそうにミヅキを眺めている。小さい体に毛布をかけてやり、おやすみと囁いて部屋を出た。
ソファーに寝転び目を閉じる。明日から色々忙しくなりそうだが、ちっとも嫌な気分ではない。
むしろ久々に気持ちよく寝られそうだ。

立ち読みサンプルはここまで

四　魔力

朝起きると知らない天井が目に入った。ここどこだ？
起き上がり周りを見ると、シルバが尻尾を振りながら私が起きるのを待っていた。
【シルバ、おはよう】
【おはよう。よく眠れたか？】
【うん。夢も見ないでぐっすりだったよ。起きてこれが夢かと思ったくらい】
【それは困る。これが夢なんて耐えられない】
シルバは確認するようにペロペロと顔を舐めてくる。シルバに舐められて意識が更にはっきりすると、ベッドを降りて部屋の扉を開く。隣の部屋では、ベイカーさんがすでに起きていた。
「ベイカーさん、おはよーございます」
「ミヅキ、おはよう。よく眠れたか？」
そっとベイカーさんに挨拶をすると、笑顔で近づいてきた。
この世界の人達は皆優しいなぁ。私は「うん」と笑顔で頷いた。
「さぁ腹減ったろ。飯にしよう！」
ベイカーさんがキッチンというには質素な台に向かった。シンクのような場所に立ち、

「ウォーター」
と言って水を出し手を洗う。凄い！　あれも魔法だよね？
「ベイカーさん、みずのまほー？」
キラキラと目を輝かせながら尋ねると、口元を緩ませたベイカーさんが屈んで私の手を取り、洗ってくれる。
「ミヅキも魔力があるならできるはずさ。とりあえず飯を食ってからな」
そう言ってニカッと笑う。わぁ……その笑顔は眼福。
見た目はやっぱりカッコイイなぁなんて思っている傍で、ベイカーさんは、パンを取り出しナイフで切り分けていく。パンをお皿にどかっと置くと、竈に向かって「ファイヤー」と言って火をつけた。
次いで、なにもないところからフライパンや肉を出して焼きはじめる。
おお！　いちいち魔法に反応してしまう。
「ベイカーさん、どっからものだしてるの？」
先程から、空中から色々なものが出ているように見える。
「あぁ、これは収納魔法で、亜空間にものをしまっているんだ。時間経過もほとんどないし便利だぞ」
おお！　異世界の定番魔法だね！　超便利そう。是非ともこれも覚えたいなぁ～。っていうか、朝からお肉を食べるのかなぁ……